2017年度 聖学院大学総合研究所 スピリチュアルケア研究会 主催
第１回スピリチュアルケア研究講演会
「人生の締めくくりに寄り添うたましいのケア　-生と死に向き合うことの現実-」報告

司会：田村綾子先生（下段右）
発題者：西村和江先生（上段左）

2017年７月21日（金）に、聖学院大学ヴェリタス館教授会室において、聖学院大学総合研究所主催による2017年度スピリチュアルケア研究講演会が72名の参加者により開催された。

当日は、田村綾子教授の司会のもと、救世軍ブース記念病院、老人保健施設グレイス、特養恵みの家　チャプレン長の西村和江氏により、「人生の締めくくりに寄り添うたましいのケア-生と死に向き合うことの現実-」の論題のもと講演がなされたのち、質疑応答が行われた。

講演では、チャプレンとは何か、西村氏がなぜチャプレンになったのか、また、チャプレンの目指すスピリチュアルケアとは何か、チャプレンの実際の働き、全人的な存在としての人間と魂のケアとは何か、チャプレンとしての心得等が話された。

講演のなかで、とても印象的な二つの学びの場面があった。一つ目は、ケースから学ぶ前に、個人ワークとして課された次のような言葉に、あなたならどのように答えますかという西村氏の問いである。①「ずっとそばにいて」②「死んだあとはどこへ行くの」③「あなたも一緒に死んで」④「明るくなる話をして」。参加者から次のような反応があった。Aさんは、「あなたも一緒に死んで」と言われたら、「まだやりたいことがあるから、今はごめんなさい」とやんわりと答える。また、Bさんは、「死んだあとはどこに行くの」という問いに対して、「あの世に行くよ。今は一緒にいけないが、必ず私もあの世にいくよ。」と答えてあげるという意見が出され、会場の雰囲気が和んだ。西村氏からは、「ずっとそばにいて」という問いに対して、「今、一緒にいますね。（寄り添い30分ほど経過した後）今ここから去るけれど、いつもあなたと一緒にいるからね」と言葉かけをしてその場を離れる。また、「明るくなる話をして」に対しては、世間話をするように心がける。好きなものの話をする。メロンが好きな人の場合メロンの話をする。その人の価値観を受容するようにする。といった答えを挙げられ、一つ一つの寄り添いの言葉かけが、実践的でとても参考になるものであった。二つ目は、死への不安にどう向き合うか、生きる希望をどのように支えるか、信条の相違と葬送儀礼の現実として、３つの実例が提示されたことである。個人的な実例であるため、説明は控えるが、実に参考になる寄り添うことを重視した事例であった。

質疑応答では、参加者の多様な関心を反映して、多岐にわたる質問が出された。そのうち四点紹介する。一つ目は、患者の話を聞くときの注意はあるかという問いである。答えとして、例えば、「死にたい」という患者に対して、言葉かけを次のようにする。「どうして、死にたいと思っているのですか。楽になりたいのですか。本当に今苦しくて、ともかく迎えに来てほしいのですね。」と受容し、そこにとどまって話を聞く姿勢をどう示せるか、どう寄り添えるかがポイントであるとのことであった。二つ目は、「私は罪深い者である。そんな私でも救われるか」という問いに対して、どのように答えたらよいかという問いである。その答え

として、どう救ってあげたらよいか考える。救いはあるのか考える。そこで次のように言葉かけをする。「あなたは救いを求めているのですね。求めさえすれば救われる。聖書にはそう書かれています」と答えながら、チャプレンとして、聴く姿勢があることを言葉や表現で示すことが大切である。時には自分の生き様を表すことも必要であるということであった。三つ目は、チャプレンとして、気をつけていることがあるかという問いである。患者と家族の両方のケアを大切にしている。時として、どちらかのケアに偏りがちになるが、両方のケアが偏らないように心がけている。例えば、食べたい患者、食べさせたら死んでしまうと考える家族がいる。患者と家族の間に立ち橋渡しの役割をする。患者、家族の両方のカウンセリングを丁寧にする。お互いが納得する答えを導き出す。患者、家族を大切に思う気持ちに寄り添う。また、チャプレンとして、職員のケアに心掛ける。いろいろな委員会や会議に出席し、日ごろから職員と仲良くなるように心がけている。医師との連携については、医師にもいろいろな人がいる。医師にとって、患者の死は敗北である。ある面特殊であるが、皆が専門医ではない。それぞれの専門の医師と緩和ケアについて、綿密に話をしていく。例えば、「一緒に死んで」という患者の場合、本当にしんどいが、医師は死に至るまでどう支えるか。緩和するためにどう立ちふるまえばよいかを考える。共有できるところは共有して、伝えるべきところは漏らさず伝えるようにしている。四つ目は、スピリチュアルケアと魂のケアと２種類表現があるが、違いがあるのかという問いである。今のところ用語の統一ができていない。内容としては同じであるという応答であった。

最後に、人生の締めくくりに寄り添うこととは、どのような働きであるかということについて話された。よくも悪くも一人ひとりの生き様がそこに表され、どんなに避けたいと願ってもいつかは訪れる死という現実がそこにある。死という現実の前にケアする側が提供できるものは何一つなく、ただただ教えられるばかりである。西村氏は自分自身の死について「わがうめきよ　わが賛美の歌となれ （中略） わが熱よ　汗よ　わが息よ　最後まで　主をほめたたえてあれ」という言葉であらわし、講演を結んだ。

（文責：吉田　進［よしだ・すすむ］聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）